

# “アメリカは我々を脅している” ——ヨーロッパ人は目覚

めつつある：

アメリカと EU はもはや盟友ではない

By: Roman Baudzus

Global Research, August 25, 2014

<http://www.cashkurs.com/kategorie/wirtschaftsfacts/>



ウクライナでのマレーシア航空機撃墜の余波として、西側のメディアは、ワシントンの先導に従って、ロシアとウクライナの親ロシア分離主義者が、この旅客機撃墜の犯人だったとヨーロッパ人に信じさせようと報道を操作した。ドイツでは、ワシントンからもキエフからも、彼らの無責任な主張を支持する証拠は全く出されていないにもかかわらず、報道機関はワシントンの宣伝マシーンの延長だった。

しかし、ヨーロッパの一般的ムードが変わり始めるのに、それほど時間はかからなかった。その転換の要因となったのは、米上・下院で法律として可決されたアメリカの脅迫で、それは究極的に、米軍によるオランダの侵略があり得ることを公然と宣言したものだ。

<http://www.spiegel.de/politik/ausland/internationales-strafergericht-us-kongress-droht-niederlanden-mit-invasion-a-200430.html>

これが知れたとき、怒りの声が、オランダの政府だけでなく民衆の間からも発せられた。こ

の法律によれば、万一、米国市民がハーグの国際刑事裁判所（ICC）に連れ出されて、起訴されるようなことがあれば、ワシントンは、訴追を防ぐために、この国を侵略する先制的権利を行使するというものである。

マレーシア政府が 2011 年に、ある裁判の席を許可したことを思い出していただきたい。ここでは裁判官がイギリスの訴訟手続きの伝統に従って、ジョージ・W・ブッシュとトニー・ブレアを戦争犯罪人として有罪にした。

<http://www.aljazeera.com/indepth/opinion/2011/11/20111128105712109215.html>

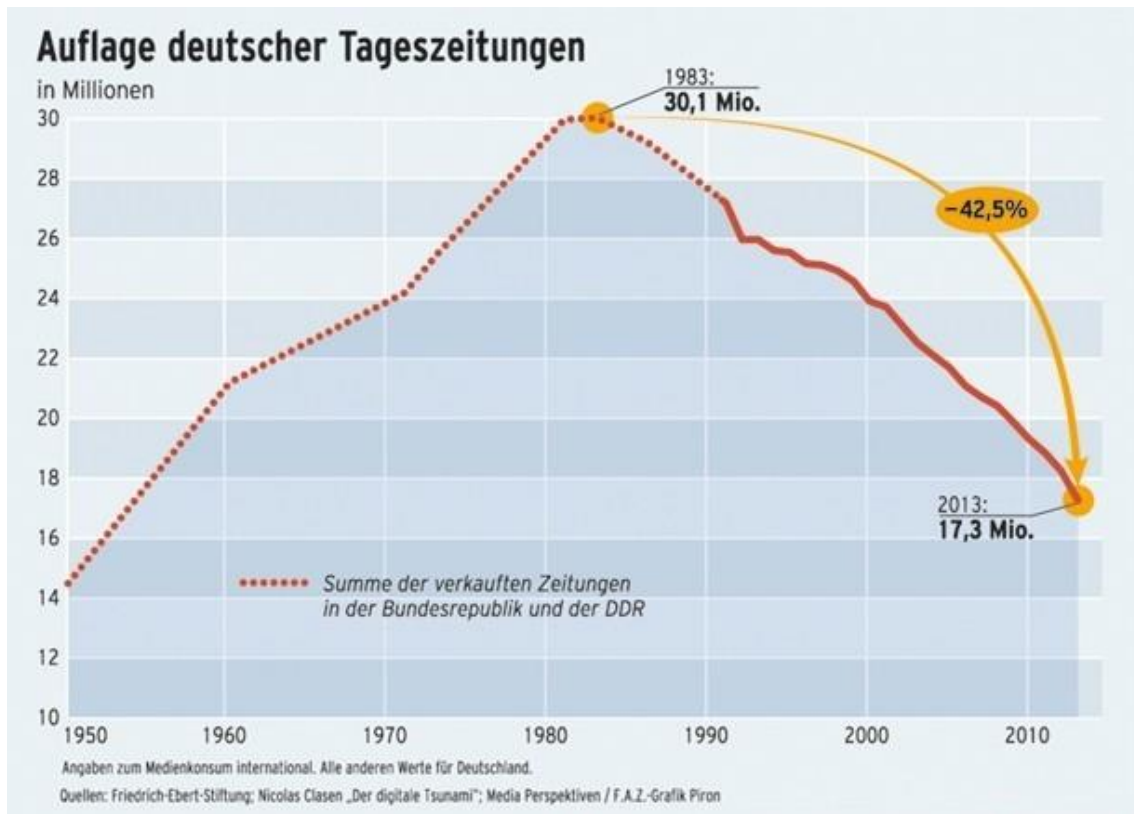
ヨーロッパ人の中には、この裁判の判決と 2 機のマレーシア航空機の喪失との間に、関係があるのかどうかを問題にしている人たちがいる。

それだけでなく、明敏で知性あるヨーロッパ人たちは、ワシントンのロシアを悪者にしようとするキャンペーンの意図を理解した。あるオランダの教授グループは、8 月 12 日、ロシア大統領ウラジミール・プーチンに公開書簡を送り、西側メディアが繰り広げた嘘の宣伝に対し、署名者一同が公的に謝罪した。

<http://futuristrendcast.wordpress.com/2014/08/05/an-open-letter-from-the-netherlands-to-putin-we-are-sorry/>

ヨーロッパのこれまでの“一流紙”が読者の信用を失った。有力なインターネット・サイト <http://www.paulcraigroberts.org/> などに依存するヨーロッパ人がますます増加して、西側の主流メディアのプロパガンダ的性格を、十分に知っている。

主導的なドイツの新聞、フランクフルター・アルゲマイネ紙（FAZ）の最近発表した図表は、何らかの理由によって、ドイツ人がドイツの新聞から離れるようになったことを示している。ドイツの新聞の累計販売数は、1983 年にその頂点に達し、3,010 万の販売部数があった。



それ以来、事態は悪化の一途を辿った。2013年には販売部数はわずか1,730万に落ち込んだ。これは42.5%というかなりの減少で、多くの新聞社をひどく傷つけている。継続的なコスト削減計画、大幅な首切り、それに「フィナンシャル・タイムズ・ドイチュラント」のような日刊紙の廃刊が、ワシントンに忠誠を誓う諸新聞の結果となっている。この減少の言い訳はいろいろあるが、本当の理由は、ドイツの新聞がもはや読者を真剣に考えていないということである。

ドイツ人たちは、再統一された彼らの国が、第二次大戦の終結後69年経った今でも、まだ米軍に占領されているのはなぜなのか、なぜ彼らの国はワシントンから独立した外交政策をもてないのか、なぜドイツのメディアは、主権国家であるはずのこの国のきわめて異常な性格について、開かれた議論をしないのか、といったことを疑問にしている。

過去数年の間に、メディアの宣伝的性格は、新聞読者の間で——特にドイツでは——巨大な抵抗を生むようになっていった。主流メディアのインターネット・サイトに発表されるコメントを見るだけで、腹を立て失望した読者が、これまで鼻息にしていた新聞が、ワシントンの宣伝キャンペーンに積極的に参加しているのを非難して、去っていくのがわかる。読者が目にするのは、探求するジャーナリズムでなく、宣伝である。そこには証拠や正直な報道の代わりに、当てこすりや滑稽な非難がある。ドイツの新聞「ディ・ヴェルト」は、エボラ熱

ウィルスの発生を、ロシアになすりつけさせた！

<http://www.welt.de/politik/ausland/article131459175/Russland-hat-Ebola-zur-Waffe-gemacht.html>

ワシントンがヨーロッパをけしかけて、ロシアと戦争させる危険があるのを考えれば、これだけ多くのヨーロッパ人が、主流メディアによって広められた不信のプロパガンダの嘘を見抜いているのは、うれしいことである。インターネット・サイトは、今、新聞の見捨てた役割を引き受けている。こうした主として独立のインターネット・メディアは、自分を代替メディアと呼んで、プロパガンダでなく、客観的で真実の情報を与えることを目標にしている。ドイツの大きな新聞のいくつかは、彼らが社会メディアを利用して、自分たちのウェブサイトに掲載の否定的な意見は、プーチンからカネをもらって書いたものなどと主張したとき、わずかに残っていた信用をなくしてしまった。我々はこのグロテスクな主張を、笑うべきか泣くべきかわからない。

答えられていない問題は、なぜドイツの主流メディアは、ドイツでなくワシントンに奉仕するのかということだ。ワシントンは宣伝料をたっぷり払っているのだろうか？

ここで最近のファーガソンの事件に目を移すと、このような出来事は、警察国家アメリカはいま現れてきたものでなく、すでに存在していたことをわからせてくれる。テレビやインターネット・ビデオで見る、野戦服を装着した残忍な、軍隊化した警官隊が、抗議者やジャーナリストにひどい暴力を振るっている様子は、アメリカは民主国家か警察国家かという疑問を、ヨーロッパで引き起こした。中東における継続するアメリカの人民虐殺、イスラエルのパレスチナ人虐殺へのワシントンの援助、そして今、東部および南部ウクライナのロシア人を、ワシントンがキエフに作った政権が虐殺している様子は、アメリカのイメージを、白い帽子から黒い帽子に変えてしまった。もはやアメリカを信ずることはできない。アメリカは我々を脅迫している。

最近、「ディ・ヴェルト」の記者 Ansgar Graw は“米警察が私の敵となった日”という記事を書いている。

ワシントンにいる、アメリカ寄りの「ディ・ヴェルト」の記者でさえ、今ではアメリカ警察の暴力のひどさを直接体験している。次を見よ――

<http://www.welt.de/politik/ausland/article131363772/Der-Tag-an-dem-die-US-Polizei-mein-Feind-wurde.html>

これも――

<http://www.handelsblatt.com/politik/international/krawalle-in-ferguson-panzer-gegen-protestler/10356412.html>

米国に 15 年も住んでいたドイツのジャーナリストたちが、アメリカを去る決意をしたと読者に告げている。彼らは、9・11 以来、この“自由の国”で事態がますます悪化していったこと、ファーガソンの抗議デモ取材したことで脅迫され、手錠をかけられ、逮捕されたことを報告している。

警官が 18 歳の黒人を殺したことが抗議運動の発端となり、これに対する反応が、世界の目を、警察国家に変化したアメリカに向かって開かせた。人間の権利と自由の名において世界中に軍事基地を置いている国家、主権国家の内部問題に暴力的に干渉し、都合のいい時に戦争を仕掛ける国家、それが今、自国の抑圧された人民に戦争を仕掛けているとみることができる。自分以外のあらゆる者に適用する基準を、傲慢にも自分にだけは免除することによって、アメリカその信用を破壊してしまった。

今、オランダ人は、もし国際法がワシントンの戦争犯罪人に対して適用されたときに、ハーグに現れるであろうアメリカ軍を待っている。あるドイツの雑誌が最近言ったように、「アメリカのような味方がいれば、敵は必要でなくなる」。

*Roman Baudzus* は、ドイツの金融・経済ブログ“*wirtschaftsfacts*”の共同経営者。

<http://www.cashkurs.com/kategorie/wirtschaftsfacts/>